
潜在能力は有効に使いましょう

でいる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

潜在能力は有効に使いましょう

【Nコード】

N2114Y

【作者名】

でにいる

【あらすじ】

笹木涼（主人公）は平凡な高校生。

幼馴染のエル（巨乳）や悪友の燐（負け犬）を巻き込みつつも比較的平和な毎日を過ごしていた。

あるとき涼たちのクラスに転校生がやってくる。

やってきたのは、銀髪の美少女リア（貧乳）。

彼女にクラスの反応は……全体の半分が土下座した。

え？　なんで土下座？

ファンタジーじゃないか！！

いいえ、ファンタジックコメディです。

日常のひととき

0

「いい加減にしてください！」

「……黙るのは、あなた」

みなもとどう
源莊七号室。

いまにも抜けてしまいそうな床。所々がかびた畳。

六畳一間のつくりが何とも言えない侘しさを醸し出している。一言でいえば、廃れている、が妥当じゃないだろうか。

このオンボロな部屋では現在、熾烈な女たちの戦いが始まっている。た。

「何を言われようとも、涼くんは渡しません！」

金髪の少女、エルは大きな二つの隆起の前で、手をぐっと握り締めた。

隆起とはすなわち、おっぱいのことだ。

豊満なそれは見る者を魅了する。

「……涼は私のもの。これは決定事項」

小さな声で呟くのは、銀髪の少女、リア。彼女は淡々と、無表情で答えた。

エルと違って、体に起伏が少ない、乏しい、少ない。

大事なことなので二回言いました。

「なっ!?! そんなのずるいです!?!」

「ずるくない……かしこいだけ」

「い、一緒じゃないですか！」

頬を膨らませ不満そうに言うエルと、それをなんなくあしらうリア。彼女らは、互いににらみ合い、一步も引かない意思を見せ合っていた。

そんな様子を遠目で眺めている一人の少年。

何も隠してないけど、僕こと、笹木涼（ひなぎりょう）のことだ。僕はもう一時間以上、この光景を目の当たりにしている。

「だ、だいたい、魔王側がなんで涼くんを狙うんですか！ 涼くんは神の力を持つ者ですよ！？」

「違う……涼は魔王の力を持っている……それは実証済み」

「う、嘘です！ だ、だって、いまも神の力を感じますし！」

「それは私も同じ。魔王の力、感じる」

なにやら僕の話をしている様子だが、何を言ってるのかさっぱりわからない。

神？ 魔王？

はっ！

「ま、まさか！！ 僕はさんちゃんねるの神」

「じ、じゃあ……涼くんは相反する二つの力の最高位を……両方もつているということですか……？」

「……そういうことになる」

「……」

僕を一瞥たりともせず、彼女らはおのおのに驚きの表情をしていた。

反応してくれなくてくやしい、なんて思っていないからね！

……話の内容から察するに、僕には何かしらの力があるらしい。しかもそれはすごいことのようなのだ。

二人の驚きようを見れば一目瞭然だった。

「あっ」

思わず僕は声を上げた。

「どうしたんですか？」「……なに？」

二人揃って僕のほうを訝しげに見てくる。

だがそれも些細なこと。

僕は気づいてしまった、とても重要なことに。

それは僕にとって、これからの将来を左右するかというほどのこ

とだったのだ。

「……ひとつ、聞いてもいいかな？」

人差し指を立てて、僕は真剣な声で言った。

「それは就職で有利に」

「なりません」「ならない」

即答だった。

神とか魔王は資格ではないらしい。

1

二日前のこと

僕こと笹木涼は、いつも通りに平凡な日常を過ごしていた。

いつもどおりに目覚め、いつもどおりに朝の支度をする。

それが僕の平凡であり、日常だった。

もう桜が満開になる季節。

春になると変なのが出てくると母さんから聞かされてきたけど、

残念ながら今年はまだ見ていない。というか今まで一回も見えてない。

まあ、それを言ってる母さんがいちばん変人なんだけどね。

僕が実家にいるときは「出たな、魔王！ その命頂戴する！」

「ははは、神に使わされし勇者よ！ 返り討ちにしてくれるわ！」と父さんとイチャイチャしてるのを毎日見てたからね。真剣で切りかかったりとか、甲冑着てたりとかでかなりリアルだったけど。まあ、傍から見ている僕に言わせれば、いい年して何してんのこの人たち？ って感じだよな？

つまり、何が言いたいかというと、僕は変人がどれくらい変な人

のことを指すのかわからないということ。

幼いころから両親たちの変人ぶりを見ている僕はその手の感覚が麻痺しているらしい。

この前も悪友から「お前の幼馴染なんだよ!? いろいろおかしいぞ!」と何やら批判されたところなのだ。

ピン、ポーン……

つつましいチャイムの音が響く。

おっ、噂をすればなんとやらで、

「涼くん、学校行きますよー」

なじみのある透き通るような声。

悪友に言わせるところのいろいろおかしい幼馴染の声が聞こえてきた。

「はむはむ、あいあい。わかりましたよー」

曖昧な返事を返して、朝食のパンをかじりながら玄関へと向かう。

ドタバタと足音をたて、駆けていくと、

そこには金髪の美少女が立っていた。

彼女越しにドアの向こうからの照光が、本人の金髪と相まって、

きらきらと輝いているように見える。彼女を何度も見ている僕ですら、綺麗とか、美しいとか思ってしまうほどだった。

そんな彼女は、まごうことなき美少女だった。

見惚れていると、

「早くしないと遅刻しますよ!」と急かすように言われた。

「ふあふあっふえふ」

わかってると言おうとしたが、パンを加えている状態なのでちゃんと覚えてない。

急かされた僕は腰を落として靴の紐を結び始めた。

「もう! ほんとにわかっているんですかっ」

どうやら解読してくれたらしい。

さすが幼馴染、と思った。

僕がこっちに来ると言った時も「わ、私も行きます!」と一緒に進学したくらいだ。

今では、この源荘の隣にあるデザイナーズマンションの一室に居を構えて、毎朝僕を迎えにきてくれている。

本当に気のきく幼馴染だ。いつそのことお母さんって呼びたい。

「ごくん……できた幼馴染を持って僕はしあわ　　」
目の前の光景に息をのんだ。

パンを飲み込んで、靴の紐を結び終え顔を上げると……そこには二つの山があった。

盛り上がり、圧倒的な存在感がある。

おっばいだ。

制服を征服せんがごとく、双乳が大きく自己主張している。

今、下から見上げている僕からすれば、上が見えないほどの大きさだった。

僕は率直に、

「ごめん、エル。下乳で上が見えない」

「!?!」

感想を言ってみた。

後ろに飛び退くように僕から離れるエル。その顔は羞恥のためか真っ赤になっていた。

いまさらだけど、彼女、エルトリーナ＝ラファードは僕の幼馴染だ。

小さいころからなんでもずっと一緒だった。

「ははは、恥ずかしがることないよ。一緒にお風呂に入った仲じゃないか」

「っ!　い、今と昔じゃ全然違いますっ!」

「うん。確かに大きくなつたよね?」

「ど、どこ見て言ってるんですか!」

どこって、そりゃ、ねえ?

僕の飄々《ひょうひょう》とした態度にエルはもう涙目だ。

こちらをキツと睨み、両手でその大きな胸を隠している。

「おっぱいだよ?」

「少しは悪びれてください!」

「乳だよ?」

「言い方の問題じゃありません!」

「パイ乙」

「どういう意味ですか!」

「早く行かないと学校遅刻するよ?」

「涼くんがそれを言いますか?!?」

私立神魔^{かみのま}高校。

それが僕やエルの通う高校だ。偏差値、中くらい。部活動成績、そこそこといったどこにでもありそうな学校。

特徴は、特徴がないのが特徴だ。

目立つものといえば、校門近くの石碑。刻まれている「変人こそ天才だ」の言葉は、初代校長の口癖だったそうだ。

校長が変人だったのかな?

ともあれ、僕がこの学校に通おうと決めたきっかけがそれだったのだ。

なぜ実家から遠いこの学校に進学しようと思ったのかと聞かれれば、思い当たる節は一つしかない。

僕は思った。

こんな面白いことを石碑に刻む校長が建てた学校がつまらないわけがない、と。

僕の成績ならばもう少しレベルの高い学校に進学することもできただけ、

やっぱり一度しかない青春。

謳歌するには、面白い学校に行かないとね?

ちなみにこのことをエルに話すと「そんなことのために私は!!」
となにやら手と膝をついてうなだれていた。
何かあつたんだらうか?

教室に入ると、雰囲気違和感を感じた。

なんというか、男女問わず騒がしい。活気に満ち溢れている。

「どうしたの?」

僕は目の前の悪友に声をかけた。

「おお、わが友、涼よ!」

「ごめん……僕、友達とは……」

「思っただけでもそこは友達で通してくれよ!」

悪友は悲痛に叫んだ。

ガラの悪そうな茶髪に、ピアス。チャライ容姿に比べて、心がピ
ユアなこの男。

名を、紅蓮^{くれんりん}燐。

名前負けとは、まさにこの男のことだろう。

この男を一言であらわすなら、負け犬。

「ものすごい失礼なこと考えてないか?」

「うん」

「ちょっとは悪びれるよ!」

「だって負け犬は事実だし」

「そ、そんなことねえよ! お、お前らもなにうなづいてんだ!」

クラスを見渡すとほぼ全員が、うんうんとうなづいていた。

やっぱりみんなもそう思うよね。

「で、次は誰にフられたの?」

「まだフられてねえよ!」

「まだって……」

燐は、学内にいる女子全員に告白して全員にフられた男だ。

ゆえに負け犬と呼ばれている。

今では他校の女子にも手を出そうとしているらしい。まあ、結果は見えているけど。

僕は燐を不憫そうな目で見た。

「そ、そんな目で見るなよ！」

「まあ燐のことなんてどうでもいいけど」

「ど、どうでもいいとか言うな！」

「朝からテンションが高いね」

「誰のせいだよ！」

「まあまあ、落ち着きなよ」

「お前が言うな！」

すでに息絶え絶えの燐に気がつかってやったのだが。

それにしても……不憫なやつだ。

「それで、どうして皆騒いでいるんですか？」

このままいつても終わらないと思ったのか、僕の隣にいたエルが声を出した。

それが救いに見えたのか燐は、

「おお！ さすが、ラファエ」

「……！」

何かを言おうとした。

だが刹那の間に、燐は窓の外にいた。

え、なんで？

窓ガラスには人の形をした跡があり、エルはまるで何かを押ししたような体勢だった。

僕はわけがわからなかった、けど一つだけ理解していることがある。

「ここ三階だよな？」

呟いたとき、窓の外にあった燐の姿は消えていた。

「ぎゃああああああああああ」

「……」

燐の声が断末魔に聞こえたのは、僕の気のせいだと思いたい。

あ、騒ぎの理由聞いてないな。

結局、燐が帰ってきたのは昼休みだった。

全身をぐるぐる巻きの包帯で包んで。まるでミイラだ。

「ええと、大丈夫？」

「あ、ああ」

僕の問いに答えてくれる。

だけど、その視線はエルのほうへチラチラとくばられていた。

まるでエルを恐れるように僕で身を隠しながら。

そんな燐にエルはにこりと微笑み、

「次はありませんよ？」

一言。

燐は顔を青くさせ、何度もうなづいていた。

？

「それで？ 結局、朝なんで騒いでたの？」

朝は結局聞くことができなかったので、僕は問うた。

「ああ、転校生が来るんだよ……」

「転校生？」

「ああ……というか、今の今まで誰にも聞かなかったのか？」

「うん……死んだ燐が浮かばれないと思って……」

「死んでねえよ！ 生きてるよ！」

「ちっ」

「お前、ほんと鬼だな！」

「で、転校生の話は？」

「……」

燐は観念したように肩を落とした。

全く世話の焼けるやつだよ。

「って、来てないのか？ 今日、転校してくるって話だったんだけ

ど」

「そういえば、来てないね？」

「来てませんね」

僕のふりにエルも首を縦に振る。

同時におっぱいが揺れたのは、内緒だ。

「魔族の事前通知じゃ、今日のはずだったんだが……」

「マゾク？」

僕は首をかしげた。

マゾクって何？

燐は、僕の反応に慌てたように、

「な、なんでもねえよ！？」

「そ、そうです！ なんでもないです！」

……なぜか、エルまで一緒に慌てていた。

僕にだけ隠すつもりだな？

うーむ、マゾク、まぞく、マゾ……はっ！

「大丈夫だよ」

僕は優しい目で二人を見た。

わかってしまったから。

「世の中、そういう性癖もありだつて言う人はいっぱいいるから……」

二人は、「あれ」な人たちだったんだ……

そんなことも知らずに僕は今まで……

「……鞭で打とうか？」

「Mまじゃねえよ！」

二人は声を揃えて否定した。

わかってるよ。君たちはMま族だよね？

「……」

昼休み、僕の生温かい視線が途切れることはなかった。

六号室の転校生

2

結局、その日に転校生はやってこなかった。

盛り上がりを見せていたクラスメイトたちは、皆そろって肩を落とす、ため息をついていたりする。

それだけ転校生を楽しみにしていたのだ。その気持ちはわかる。でもまあ、皆も落ち着きたまえよ。

僕が考えるに、登校する学校を間違えたに違いない。

転校生はおつちよこちよいさんなのだ。

仕方ないよ。うんうん、あるある。

ちなみに、エルや燐にそれを話してみると「そんなの涼くんだけです!」「お前ぐらいだよ!」と驚愕していた。

失礼な、僕は一回だけだよ?

下校時。

僕はいつものようにエルと一緒に帰路についていた。

源荘へと僕は帰る。エルは、その隣のマンションへと帰るため、それぞれの方向は同じなのだ。

でもなんというか、幼馴染と一緒に下校するのは役得感があるよね?

そんなことを思いながら、僕はエルに話しかけてみた。

「……ねえ、M」

「まだ引つ張るんですか、それ!?!」

僕の問いかけにエルが反応する。その顔は驚きでいっぱいだよ。やれやれ、反抗期かね。

「ねえ、エル」

「普通に流されましたっ!？」

エルの顔は驚きが二倍速だ。すごい。

「転校生さん、明日は来るかな？」

僕が問うてみると、

「……気になるんですか？」

急にエルはムスツとした顔になった。

え、何でそんな顔するの？ 僕も楽しみなだけなのに。

「どんな人かな」

「どんな人でしょうね……」

「宇宙人か、未来人か、超の」

「それは言わせません!！」

「男の子かな？ 女の子かな？ それとも、両方の人かな？」

「最後のは個人的に聞かなかったことにしたいです……」

げんなりとするエル。かなりお疲れの様子だ。日ごろの苦勞がたたっているのだろうか？

「ただ、もうひとつだけ聞いてほしい。僕にはまだ気になることがあるのだ。」

「転校生は、Sサドかな？ Mマッかな？」

「それはもう忘れてください!！」

「Mだったら、エルや燐と仲良くできそうだね」

「そんな人とは仲良くできません!！」

「あ、エルたちからすれば、Sの人のほうがいいよね……」
「ごめん……」

「何かこの謝罪は釈然としませんよ!！」

エルと別れ、僕は現在の住居である源莊みなせに帰ってきた。

このアパートの主な特徴を言えば、とにかくボロい。本当に人が

住んでいるのかと思うほど廃れている。

例えて言うなら、紅蓮^{くれんりん}燐だ。

やつのように全ての女性から見放されているとしか言いようのない存在。

つまり源荘と燐は似ているのだ。そっくりだと思つ。特に誰も寄り付かない外観とか。

だけど苦学生である僕にしてみれば、家賃一万円のこのアパートは最良物件だったのだ。

最初に家賃の話聞いた時は耳を疑ったけど、いざここに来てみると納得がいった。

ああ、確かに一万だな、と。

苦学生といったけど、別に両親からの仕送りが少ないわけではない。

月五万、といえば学生にしたら多いほうだろう。だけど皆さんよく考えてほしい。

ゲームとか、漫画とかほしいよね？

だから生活費はできるだけ削らないと、ね？

ゆえに僕はこの源荘に住んでいる。主に生活費をけちるために。

二階へと続く階段を上り、僕の自室「七号室」へと向かう。

六畳一間のその部屋こそ僕の家だ。

二階に上がって、つきあたりの部屋のドアを開けると、

「……………」

そこには……………下着姿の女の子がいた。スカートを手にかけているところを見ると、着替え中のご様子だった。

「間違えました」

僕はすぐにドアを閉めた。

「ふう、危ない危ない。三秒ルールでギリギリセーフだね」

二コンマ五秒くらいだったな、と安堵の息をもらす。

一歩下がって部屋の番号を見ると、「六号室」と書いてある。僕の部屋じゃない。

どうやら本気で間違えたようだ。まあ、よくあることだよ。

僕の部屋はその隣、つきあたりの二つ目。七号室。

ドアが開く。

「ひやっとしたよ……女の子が着替えてるなんて。ここがテキサスなら、僕はハチの巣だろうね」

「待って」

「OH！ ジョージイ、ナイスジョークだ！ H A H A H A」

「……あなたは、笹木涼？」

「……はい、そうです」

開いたのは、六号室のドアだった。そこからひよっこりと少女が顔を出している。

……誤魔化しきれなかった。

くそう、どうしてばれたんだ！

「そう」

僕の名を呼んだのは、銀色の髪をした少女だった。

何を隠そう、先ほどの下着姿の少女である。

エルの金髪と対になるような、銀髪。透き通るようなその色は、美しい。そしてそれを際立たせるがごとく、少女はさらに美麗だった。

ただし、その顔に表情はない。無表情という言葉は彼女のためにあるような気がした。

「隣に越してきた、リア。よろしく」

淡々と呟くと、リアと名乗った少女はドアを閉め、自室に戻った。

……

「……え？」

僕はその場で固まった。

着替えのことで怒られるのかと思っていたのだが、隣人は何事もなかったかのように場を去ってしまったのだ。

その場に取り残された僕にはもう何が何だか、わけがわからなかった。

だつて下着姿を見られて何も言わない……………はっ！

「彼女は……………痴女だったのか……………」

僕はまたも気づいてしまった。

彼女、リアは見られると、興奮する人だったんだ……………

エルや燐に紹介してあげようと思った。変態仲間として。

次の日。

教室に入ると、またも騒がしかった。

特に今回は男子がうるさいほど活気づいている。

「どうしたの？」

僕は目の前の悪友に話しかけた。

「おお、わが友、涼よ！」

「ごめん……………僕、友達とは……………」

「わかつてたけどさ！ わかつてたけどさ！？」

悪友は悲痛に叫んだ。

悪友こと、紅蓮^{まけいぬ}燐は今日も朝からテンションが高い。

「おい、今俺のこと負け犬とか思わなかったか？」

「うん」

「ホント少しは悪びれるよ！？」

やりとりの中にデジャヴを感じた。

だけど燐にはホントに手がかかるよ。この年になつても駄々をこねるなんて。

「あ、そうだ。燐に紹介したい痴女がいるんだけど」

「なんで痴女なんだよ！ 普通そこは友達とかだろ！？」

「友達つて……………僕の知り合いにM^{ミン}の人はエルぐらいしかないんだ

けど……」

『Mじゃねえよ!』

僕の隣でおなじみのエルとともに、燐は叫んだ。

「……それで、どうして皆騒いでいるんですか？」

このままでは話が進まないと思ったのか、エルが問う。

おお、ホントにデジャヴだ。次に燐が吹き飛ばされれば……

「ああ、今日こそ転校生が来るからだよ」

「へえ、そうなんですか」

「……」

エルは、相槌を打つ。当然のようにエルのおっぱいが揺れた。

……だけど僕は納得がいかない。

「どうして燐が三階から落ちないのさ」

「なんでだよ!」

燐のせいでデジャヴ失敗だよ。

僕は恨みがましく燐をにらんだ。

「なんでにらまれてんのか、まったく理解できねえっ!」

「はあ……燐にはホントがっかりだよ」

僕はため息をついた。ホント、やれやれだよ。

燐は口をぽかんとさせ、

「エルさんよ……この天然なんとかしてくれ……」

「私ではどうすることも……」

そう呟くと、二人揃ってばつが悪そうに僕から目をそらした。

やれやれ、二人ともわかってないね。

このままでは仕方ないので僕は話を続けることにした。

「それでさあ? なんで男子のほうが騒がしいの? 昨日は同じくらいだったのに」

「転校生は女子なんだよ」

僕の問いに燐は答えてくれる。なるほど女子か。

「へえ、だから男子はあんなに騒いでいるんだ?」

「ああ」

隣はうなづく。

なるほど、なるほど。確かに女子だったら、男子はうれしいよね。主に目の保養に。

「エルはどう思う?」

僕はエルにふってみた。

「……どうも思いません」

なにやら頬を膨らませ、不機嫌そうにしている。どうかしたんだろうか?

「さあ、席につけー」

その声とともに担任の先生が教室に入ってきた。時間をみると、もう朝のHRの時間だ。

慌てて生徒たちは自分の席につく。

「ええ、HRを始める前に、皆に転校生を紹介する」

その言葉に教室全体が騒ぎ始めた。

そりゃそうだと思う。昨日は待ちぼうけをくらっているのだから、今日はそれだけ期待が膨らんでしまうというものだろう。

特に女子はともかく、男子。

心なしかその目が血走っているように見える。

転校生が女子だとわかっているせい、テンションがやたら高い。高血圧になるよ?

エルのほうへ視線を向けると、まだご機嫌斜めのような。ホントにどうしたんだろう?

「入れー」

先生の声と同時に、教室のドアが開いた。

クラスメイトたちが息をのむ中で、転校生は入ってきた。銀色の髪をした女の子。

彼女はクラスメイトのほうを向き、

「リア、よろしく」

少しも表情を変えることなく、自己紹介を済ませた。

リア？ リアって、どこかで聞いたような……

「涼」

彼女は僕の名を呼んだ。

あっ！

「君は……昨日の痴女！」

「……リア」

「そうそう、確かそんな名前だった！ ほら、燐！ 彼女が君に紹介したかった痴女だよ！」

僕は先ほどから固まっている燐に声をかけた。燐は僕の左隣りの席だ。

燐は、はっとした様子で、

「ベリア」

「……！」

何かを言おうとした。

だが刹那の間に、燐の姿は窓の外にあった。

窓には人の形をした跡があり、リアはまるで何かを押ししたような姿勢だった。

僕はわけがわからなかった、でも一つだけ理解していることがある。

「デジャヴ完成だね」

そう呟いた時、窓の外にあった燐の姿は消えていた。

「ぎゃあああああああああああああ」

響いてきた燐の声は今度こそ断末魔だろうと僕は思った。

よくやったよ、燐。君の死は無駄にはしない。あらためて言おう、

GOOD LUCK、と。

満足そうにうなづいて、僕は窓から教室へと振り向いた。

「……」

目に飛び込んできた光景、それは半数のクラスメイトが土下座しているものだった。

頭の下げられているほうを見ると、転校生こと、リアの姿がある。「えっと、何の宗教？」

僕は誰にでもなく呟いた。それほどありえない光景だったのだ。

「おすわり」

その問いに答えたのは、リアだった。彼女は相変わらぬ無表情だ。

おすわりか……その意味するところは一つしかない。

僕はある一つの考えに至った。

「なるほど……僕のクラスメイトたちは、M^マだったのか……M度高いな、このクラス」

『M^マじゃねえよ！』

僕の呟きにクラスメイトたちは悲痛に叫んだ。

「大丈夫。皆でやれば怖くないよ」

『お前のその発言が怖いわ！！』

全力でクラスメイト全員が叫んだ。僕にはそれがとても言い訳がましく見えた。

若いつて、怖い。

旧校舎のウロちゃん

3

結論から言うと、僕は暇になった。

昼休みに入ると同時に女王様、もとい、リアの周りには人垣ができていた。

彼女が転校生であることを考慮しても多すぎるくらいの人が彼女を囲んでいる。そこへ朝の一件で明らかになったMクラスメイトたちも混じっているのだから取り巻きはものすごく大きい。

ここまでいくと取り巻きというより、エリマキだよね。トカゲくらいだよ。

そのおかげで彼女の左隣りである僕の席は埋もれてしまっているのだ。

これじゃ、お昼が食べられない。

エルのところへいこうにも、彼女の機嫌は相変わらず斜めなままだし。燐はあれつきり帰ってこないし。

まったく、本当に使えない燐だよ。

結局、かまってくれる人がいない僕は暇になったというわけ。

かっこよくいうと、暇を持て余している。

かっこわるくいうと、僕は友達が本当に少ない。

だけど、こうして突っ立っていてもおなかが減るだけだし……

「……仕方ない、ウロちゃんのところにも行くかな」

そういうと、僕は教室をあとにした。

かみのま
神魔高校現校舎のはずれにある旧校舎。

べつに「旧」って言うほど廃れているわけでもないし、現在の校

舎と比べてもさして差はないように見える。むしろまだ新しい。これに旧をつけるなら、源荘には「古」をつけないといけないと思うほどだ。

だけど旧校舎には、現在の校舎にない特徴がある。

それは外装だ。壁に描かれている星のような落書きや、建物全体を覆い尽くすように貼られた無数の御札が圧倒的な存在感を示している。

ヤンキーのトンネル落書きの比ではない。ヤンキーさんたちもここまで頑張らないと思う。

不気味ささえ醸し出す旧校舎のあり様。

それもあつてか、ここには生徒はおるか教師さえ近づかない。

エルや燐を誘おうとしても「絶対に行きません！ あそこにはドラゴ……なんでもありません」「バカ言うなよ！ 旧校舎は封い……なんでもない」と揃って口を濁していた。どうやら二人はビビりさんのようだ。大木さんではない。

ともかく、旧校舎は誰も寄り付くことがない場所なのだ。

中に入り、廊下を進んでいく。

造り的には現在の校舎と同じなので、非常に楽だ。

少し暗いのが気になるところだけど勝手知ったる人の家、何度も足を運んでいる僕にしてみれば迷ったりすることもない。

「確か……ここだよね」

僕は足をとめた。

目の前にあるのは「校長室」と書かれたプレートがかかっている部屋だ。他のところと比べても、明らかにここだけ偉そうな空気が漂っている。

その部屋の前で僕は、

「ウーローちゃん！ あーそーぼー！」

とりあえず叫んでみた。すると、

「やかましいわ！ というかその呼び方は止すのじゃ！」

勢いよくドアが開いた。中から出てきたのは、一人の少女。

目を惹く炎色の髪は流麗さを誇張し、髪よりさらに深い赤色の瞳は彼女をさらに際立たせている。それだけ見ると、圧倒されそうな感じなのだ。

「やあ、ウロちゃん。三日ぶりだね」

「お主は相も変わらずと言ったところじゃな……」

軽い挨拶を交わすと、がっくりと肩を落とすウロちゃん。心なしか顔が疲れているようにも見える。どうかしたんだらうか？

「ウロちゃんも相変わらずロリロリな体型だね？」

「失礼なやつじゃな！」

「素晴らしい幼女属性だね？」

「お主、本気で容赦ないなっ！」

ウロちゃんは盛大に叫んだ。

彼女の体型はとにかく小さい。身長があまり高くない僕と並んでも、頭の高さが肩ぐらいしかないのだ。はっきり言えば、幼女体型。萌えの対象だと思う。

「とにかく！ 妾の名は」

「ウールポロシャツだよな？」

「違うわ！ ウロボロスじゃ、ウロボロス！！ 誰がポロシャツじゃ！」

「惜しい」

「惜しくないわあああああ！」

うーん、惜しいと思うけどな。ウールポロシャツ、夏によく着るよね？

ウロちゃんは半目で僕をにらんでくる。

「どうして、こんなやつが『竜王』の資質を持っているのじゃ……」

「え、今日はドロクエするの？」

僕が問うと、ウロちゃんは深々とため息をついた。え？ だって、リュウオウでしょ？ 配合大変だよな。

考えていると、ウロちゃんは渋々といった感じで話しかけてきた。

「……………それで今日はどうしたのじゃ？　いつもはこんな時間にはこのんに」

彼女の言うとおり、普段僕はこの時間にここを訪れたりはいしない。来たとしても、放課後くらいだ。

「ああ、うん。僕のクラスに女王さ……………転校生が来てね。教室中が騒がしくってさ」

「ほほう、転校生とな？」

ウロちゃんは興味ありげに僕を見てくる。

「銀髪で、なんといっても美少女で」

「ほほう」

「貧乳だけどね」

「お主、本気でひどいな！」

ウロちゃんは目を見開いて驚いていた。

僕としては、ほめ言葉のつもりだったんだけど。

「その女の子がまたすごくてさ。クラスメイトの半分くらいを土下座させてたんだよ」

「土下座じゃと？　屈伏させたということかの？」

「うん」

僕は首を縦に振った。

それになぜか怪訝そうな顔をするウロちゃん。

「……………まさか」

「え？　どうかしたの？」

「あ、ああいや、なんでもないのじゃ」

「まあ、僕の見解を言えば、クラスメイトはMマだね」

「いやなクラスじゃな！」

険しい顔が一気に吹き飛んだ。

その後もお昼を取りながらウロちゃんと会話をした。

ゲームはもちろんどロクエだった。……………リュウオウはつくれなかった……………

ときどき、ウロちゃんが険しく眉間にしわを寄せていたのが気になったけど、それも「ウロちゃんって、何歳?」「二千は軽く超えておる」「ふーん、合法ロリだね」「おますごいな!!」「などとやりとりをしているうちにいつの間にか消えていた。
幼女チヨロイなと思った。

「……どこ行ってたんですか?」

教室に戻ると、真っ先にエルが話しかけてきた。

「ウロちゃんのところだよ?」

「誰ですか、それ?」

やっぱりというか、その顔は不機嫌そうだ。

でもあんずることなかれ。僕にはすでに察しが付いているのだ。

僕はエルに頭を下げた。

「エル……気づいてあげられなくてごめん……」

「な、なんですか? 急に……」

無理しなくていいよ。

僕にはわかってるから……

「今日は、女の子の日だったんでしょ……?」

「違いますっ!」

「ま、まさか! 妊し」

「ち、違いますっ!!」

エルは顔を真っ赤にして否定した。 あれ、違ったの?

「じゃあ、どうして機嫌悪いのさ」

「そ、それは……」

さらに顔を赤くして、俯くエル。いったいどうしたんだらうか? 訝しげに見ていると、ふいに後ろから声がかかった。

「……涼」

リアだった。

「どうしたの、リア? おっぱいが大きくなるコツをエルに聞きに

きたの？」

「……………違っ」

沈黙長かったな。そんなに気にしているのか……

貧乳は、貧乳で需要があるだけだね。

リアは一度エルに視線をくばらせながら、

「話、ある」

僕にそう呟いた。

「ここじゃだめなの？」

「……………」

口を閉ざすリア。

だんまりしているということは、だめということか。

「わかったよ。じゃあ、今日僕の部屋に来てよ。隣だしね」

「わかった」

僕の提案に彼女もうなづいてくれる。

簡単な約束をして、話を終わろうとしたその時、

「ちょ、ちょっと待ってください！」

エルは必死そうな形相で叫んだ。

「と、隣ってどういうことですか!？」

「ああ、うん。エルにはまだ言っただけ、リアは源荘の六

号室に住んでいるんだよ」

「ええ!？」

エルは目を見開き、リアを見た。そして激しい動作におっぱいが左右に揺れる。

「うん、いいおっぱいだね？」

「意味がわかりません！」

旧校舎のウロちゃん（後書き）

評価や感想は、作者の青春パワーや妄想パワーを格段に飛躍させますので、ご協力お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2114y/>

潜在能力は有効に使いましょう

2011年11月10日07時14分発行